

【ねがいましては】

平成29年5月1日

KYOWA SCHOOL

第318号

「患者さんは？」

「入れてください」といっても、そう簡単には入ることの出来ない空間へ行ってまいりました。

入院です。検査入院など、計画性のあるものは別として、いつ入れるかなど、全く想定していない空間です。私の場合、罹患（りかん）部位が「脳」であったため、その部位専門のフロアーへと運ばれました。症状が比較的軽かったため、私やその他の患者さんを取り巻く現場を、かなり冷静に覽ることができました。

脳疾患は、かなりの割合で血管に関わったものが多く、大きく2つに分かれるようです。梗塞（詰まる）と出血（切れる）です。私は後者でした。現在では、その比率が13対1と、圧倒的に梗塞の割合が多いそうです。その例に漏れず、入院なさっている多くの方々が梗塞でした。

脳疾患の特徴は「後遺症」と言っても過言ではありません。脳内の様々な神経回路が壊死または遮断されてしまい、一度遮断されたパイプは、そう簡単にはつながってくれません。なんとか元の状態に戻そうと努力する行為をリハビリと呼んでいます。罹患部（血管部位）は、詰まったり切れたりしない状態になれば、それはそれで外科的治療は終息を迎えますが、その後の治療が長期戦になります。私の場合はリハビリと言っても、体力回復に重点が置かれたのみで済みませんでした。重症の方々はこれからが努力の日々ということになります。最終的な回復は、自立した生活を送れる状態になったときといえそうです。

さて、入院時の外科的治療をパソコンで言う「ハードウェア」とすれば、入院中の細やかなケア（排泄の援助や点滴、そして患者たちとのコミュニケーション）は、「ソフトウェア」だと思いました。中でも四六時中密接な触れあいをする看護師さんや理学療法士さんたちの奮闘ぶりに胸を打たれました。熱や血圧を測る。車いすを準備しトイレへ連れて行く。寝たきり状態の方の排泄の世話をする。自分でお風呂へ入れない方を入れてあげる。夜間、異常がないか見回る。それぞれを総合すれば、かなりの肉体労働といえるでしょう。それだけでは何か殺伐とした感触だけになってしまいがちですが、それを大きくカバーするのが、コミュニケーションです。「ふれあい」です。

これこそが看護師・理学療法士さんたちがなさる一番重要な「治療」だと思いました。

まず、そのほとんどの方が「明るい」・・・。「笑顔」で接してくれることです。よく飛行機に乗り込むときのキャビンアテンダントの方々の笑顔が取り上げられたりしますが、まさにその域を飛び越えて世間話にまで踏み込んでいただける方々だということです。そればかりか自分の身の上話まで飛び出る始末。これは私だったからなのかなとも思ったのですが、私が子どもたちと触れ合う仕事であること、また、長ければ一部の子どもたちとは、成人に達した今でも、交流があるからかもしれません。私の面倒を見てくれた彼らは、教え子さんたちと同じくらいの年齢だったのです。

一言で・・・かれらは「すごい」です。それしか形容できません。ある方は、北海道、ある方は青森、ある方は福岡、そして極めつけは、中国（5年前来日、日本の国家試験に合格）から・・・。

皆、こころざしを持って親元を離れ奨学金を使い、夢を実現し今に至っています。それでも働くことは、当たり前ですが「苦勞」を伴います。それをけっして患者さんたちには見せずに、患者さんたちへの気遣い、心遣いを最大限に奮闘しています。そこに欠かせないもの「笑顔」・・・。

私の入院期間は3週間でしたが、「今の若者、まんざらでもないぞ」と思える出会いがたくさんありました。入院中、回復するにつれ、徐々に彼らを手伝うことは出来ないかと考えるようになりました。普通に歩くことの出来る私は、同室の患者さんの上げ膳をしたり、個々にかかっているカーテンを開けてあげたり、くらいでした。しかしそれは、看護師さんたちにとっては、あまり見られない光景だったらしく、退院時には「いろいろお手伝いいただきありがとうございました」と、お礼を言われてしまったくらいです。（私は不満たったのですが・・・）

まだまだ20歳そこそこの看護師さんたちが、ベテランの看護師さんたちと連携をとりいきいきと働いている光景は、私の中の美しいドラマとして残っています。

いきなり「くりたさーん」と言って、声をかけてくれる。私の視線の高さ（ベッドにいる）にしゃがんで、声をかけてくれる。「じゃーん」と言っていきなり現れる。そのどれもが教育の現場でなくてはならない子どもたちとのコミュニケーションであると私は強く感じました。その触れあいこそが、子どもたちの成長にとって必要であること、心の土台作りには欠かせないこと。成績という語彙が薄っぺらく感じます。

そして何にも変えることの出来ない世界でたったひとつの「こころの学校」が家族であるということ。その中の担任の先生は「おかあさん」・・・？。それともおとうさん、おばあちゃん、おじいちゃん、おにいちゃん、おねえちゃん・・・。私・・・？。どうかおかあさん、これからもお子さんと「笑顔」でずーっと触れあってあげてください。子どもたちは皆、社会へ旅立つときまで、自立するまでは「患者さん」かもしれません。患者さんたちは笑顔を待っています。

そして患者さんたちは応えます。

「おかあさん、ありがとう。」

ニコッ！